

3. 霊長類の社会とヒトの位置

チンパンジーアイとアユムの映像で、どんなところに強い印象をうけたでしょうか？わたしなどは、番組の意図とは違ったところに強い興味を示してしまいます。例えば、アイとペンデーサの挨拶行動。あるいはペンデーサがアユムにさわらせてもらうに際しての気遣い。わたしたちはこの場面に際しての彼らの心理さえ推察できるように感じます。挨拶行動は、後にとりあげる人間のテリトリー防衛行動にも深く関連するものです。それから、道具を使う野生チンパンジー。これらは世代を通じて学習によって伝えられる、れっきとした「文化」です。ヒトはどこまでチンパンジーなのか。チンパンジーはどこまでヒトなのか。霊長類の社会構造の比較によって、我々はどのように位置づけられるのか。ここで駆け足で確認しておきましょう。

(1) 霊長類の系統関係

「人間とその他のサル」という分類は、進化史的観点からは不正確。類人猿グループは、マカク属真猿類(ニホンザルの仲間)などその他の霊長類と、相当古い時代(およそ 3000 万年前とされる)に分枝した。ヒトは系統進化からみると、類人猿グループの仲間であるといえる。

- ・チンパンジーとヒトの関係:サルは進化してヒトになる?・・・そんなことはない。
- ・進化史的距離関係に影響されやすい性質と、そうでない性質がある。(例えば、「しっぽの長さ」よりも「社会構造」のほうが、進化的近縁性との関連が深い。次節および図参照。)

(2) その社会構造との関係

- ・尾の形態比較と社会構造(優劣)の比較(図参照):何が系統関係に規定されるのか?

優劣関係および「血縁者びいき」の度合いは種によって異なり、系統的な距離との相関が示唆される。

平等主義戦略と専制主義戦略:群れの個体どうしの優劣がどこまで徹底されるか

(ただし・・・平等主義戦略が「平和指向でおだやかな性格」なわけではない!)

(参考)社会脳仮説:大脳新皮質と社会構造(群の大きさ)の関係

サル・類人猿の社会構造

真猿類:母系社会が基本型。メス同士の強い絆と優劣関係。

類人猿:非母系的なさまざまなタイプの社会

テナガザル:一夫一妻

オランウータン:単独生活

ゴリラ:一夫多妻

チンパンジーとボノボ:複雄複雌の父系社会。オスの複雑な連合関係。政治活動や戦い、分配の戦略。

ヒト:複雄複雌、父系傾向が強い、そして「核家族」という独特なユニットの形成

ヒトとチンパンジー、ボノボは「父系傾向の強い社会」という(霊長類のなかで特異な)共通項を持つ。

(3) チンパンジーの文化と社会:ヒトとの比較

- ・チンパンジーの道具使用

アリ釣り

石器を使うチンパンジー

地域的に異なる文化・・・群れ内外における伝承を示す

道具の二次製作の証拠はない

- ・チンパンジーの狩猟行動、政治活動と戦い:人間の戦争観・政治観におおきな影響を与えている。

- ・教育:積極的な教育(ほめる・しかるなど)は見られないが、教育に関連する消極的な行動(見守る・まねをさせるなど)はみられる。

- ・言語:ヒトのような発声はできないが、記号を記憶して操作することができる。

「文化を持つ」「道具を使う」「狩りをする」のがヒトの特徴とする考え方は上記の事実により批判されることに。現在のところ、「直立二足歩行」「家族」「言語」という項目をヒトの特徴とする考え方があがるが、定説はないといってよい。

(4) ヒトの進化

・猿人からホモ属へ

アウストラロピテクス(600-500万年前に出現):脳容量はチンパンジーと大差なく、石器製作の証拠はみつかっていない。

ホモ・ハビリス:二百数十万年前に出現。脳容量の増加、オールドワン型石器。

ホモ・エレクトス:百八十年前くらいに出現。脳容量の増加、握斧(アシュレアン型石器)。
アフリカを出てアジア、ヨーロッパに進出。

ネアンデルタール:20万年前くらいからヨーロッパに出現。現生人類よりも大きな脳容量。

現生人類:十数万年前に出現。アフリカ起源説。4、5万年前「文化のビックバン」

・森林とサバンナの境界で進化したヒト?:イーストサイド物語

(5)核家族の起原に関する仮説

・なぜヒトの排卵周期は不明瞭なのか

・ボノボは発情期間を延長・発情シグナルの混乱

ヒト:発情期間の消滅。「父親」の誕生(ホモ・エレクトゥス:脳容量や性的二型(体重の性差)の変化)

(6)ヒトが進化適応した環境とは?

・狩猟採集という生業形態

・男女の分業

・血縁関係を核とする集団。縁者びいき(ネボティズム)

・小規模な集団、集団内・集団間の敵対・協力関係

・特定の男女の配偶関係、「父親」の存在